

ジェーンズ邸（県指定重要文化財「洋学校教師館」）の移築復旧について

1 概要・・・「洋学校教師館」（ジェーンズ邸） 熊本県指定重要文化財

- ・洋風 木造2階建てコロニア風の建物で、明治4年(1871)完成。現存する県内最古の洋風建築。居住した教師名からジェーンズ邸と呼ぶ。
- ※古城地区（現第一高校体育館辺り）に、熊本藩が開設した洋学校の英語教師として招聘したアメリカ人教師、L. L. ジェーンズの住居として建築。〈延床面積489㎡ 震災前は年間約6,000人来館〉

2 主な沿革

- ・明治4年 創建／・明治9年 閉鎖（県官舎に。徳富蘇峰などが同志社に転校）
- ・明治10年 西南戦争勃発 ※ジェーンズ邸内で博愛社(日赤の前身)の設立許可書交付
- ・明治27年 南千反畑町(県施設)に移転／・昭和7年 水道町(日赤熊本支部)に移転
- ・昭和45年 市に寄贈され現在地（水前寺公園）に移転
- ・昭和46年 県重要文化財指定（明治初期の洋風建築物として）
- ・昭和49年 記念館として一般公開



3 震災前までの移築修復の調査等について

（1）平成23年度「県指定重要文化財洋学校教師館移築復元に伴う現況調査・設計業務委託」の実施

（調査内容）

- ・解体による保存修理が必要な状態であったため、ジェーンズ邸の建物の破損状況などの現状調査と城域周辺を含めた移築を想定した復元工事の基本設計を行った。（移築場所の調査ではない）

（破損状況の主な調査結果）

- ・破損の概要・・・ベランダ部分と屋根を除けば、他は健全な状態と見られる。
- ・基礎部分の破損・・・若干の不同沈下が見られるが、構造的に問題が生じる量ではない。
- ・湿気・・・床下の一部やベランダの柱について雨水流入による湿気が指摘されているが、立地として不適当との調査結果はない。
- ・耐震性・・・現構造では耐力不足であり構造補強が必要である
⇒「移築先が確定した後、ボーリング調査を行ったうえで、再度耐震診断を行い、補強方法を検討する」
- ・修復方針・・・全解体による修理。

解体にあたって詳細な調査を行い、当初の形式技法や後年の修理内容を明らかにし、出来る限り旧形式に戻す。

(2) 平成25年度～「洋学校教師館保存修理に伴う検討委員会」の開催

⇒平成23年度の調査等を踏まえた修復工法に関する技術的な意見聴取（移築場所についての意見聴取までは至っていない）

4 文化庁からの熊本城跡の保存活用に関する指摘（平成25年度）⇒城域内への移築の検討に影響

- ・本来は平左衛門塀の復元整備の手法等に関する指摘
- ・熊本城跡の調査研究体制の不備や、保存活用全体に関する考えへの指摘も含まれていた。

⇒より確実・慎重な調査研究の成果に基づく復元整備が求められた。

また、H25年度に調査研究体制の強化のため「熊本城調査研究センター」も設置

（明治期の洋館であるジェーンズ邸の熊本城域内への移築復元の検討は、調査研究の成果に基づく場合、創建地以外は理由付けが困難な状況 ※後述の移築候補地のメリット・デメリットの整理を参照）

5 地震後の移築復旧についての経緯

(1) 文科省補助（公立社会教育施設災害復旧費補助＝博物館としての適用）の適用

- ・移築復旧について、当初、文科省は「本補助事業では、原則として現地復旧」との見解
- ・折衝を続け「現地での復旧費を上回らない限りで移築も可能」との見解を得た。（H29.9月）

(2) 移築復旧先についての検討

①移築復旧について考慮すべき条件等

- ・災害復旧補助としての早急な復旧（災害査定はH30年度当初、査定後は速やかに実施）
- ・見学の利便性等の市民・観光客サービス面、最も効果的かつ安価に実施できるコスト面

②熊本城跡の保存活用の考え方（※熊本城跡保存管理計画、同保存活用計画改訂案より抜粋）

※熊本城跡を適切に保存活用し、後世に継承していくため、各分野の専門家や文化庁等の指導を受け、定めた計画。

【1】整備方針（熊本城跡保存活用計画改訂案から一部抜粋）

- ・創建時から明治時代初期にかけて形成された遺構の保存を徹底することを前提とし、適正な状態で将来へ継承
- ・遺構確認調査や絵図・文献資料の総合的な調査・研究の成果に照らした史実を基本とする。
- ・公園整備については、熊本城跡としての本質的価値の保存と歴史的景観の維持に十分に配慮する。
- ・原則として、文化庁、県教委、熊本城保存活用委員会等との協議、調整に基づいた計画等を作成し実施。

※熊本城跡保存管理計画・・・建築物を復原再建する場合、原則として十分な資料に基づいた科学的復原に限る。

【2】整備の方法（熊本城跡保存活用計画改訂案から一部抜粋）

i 保存のための整備

ア 国重要文化財建造物（城内の櫓群）・・・幕末までの建物を対象。（遺構は明治初期＝西南戦争まで）

ii 活用のための整備

ア 歴史的建造物の復元・・・調査成果を基に史実に基づいて実施。復元の時期は幕末期を想定。

イ 施設整備(展示学習施設、便益施設)・・・熊本城の理解を深めるための施設とする。便益施設は必要最小限として景観にも配慮が重要
(※展示学習機能は復元建造物の利用もあり得る。)

③移築候補地のメリット・デメリットの整理

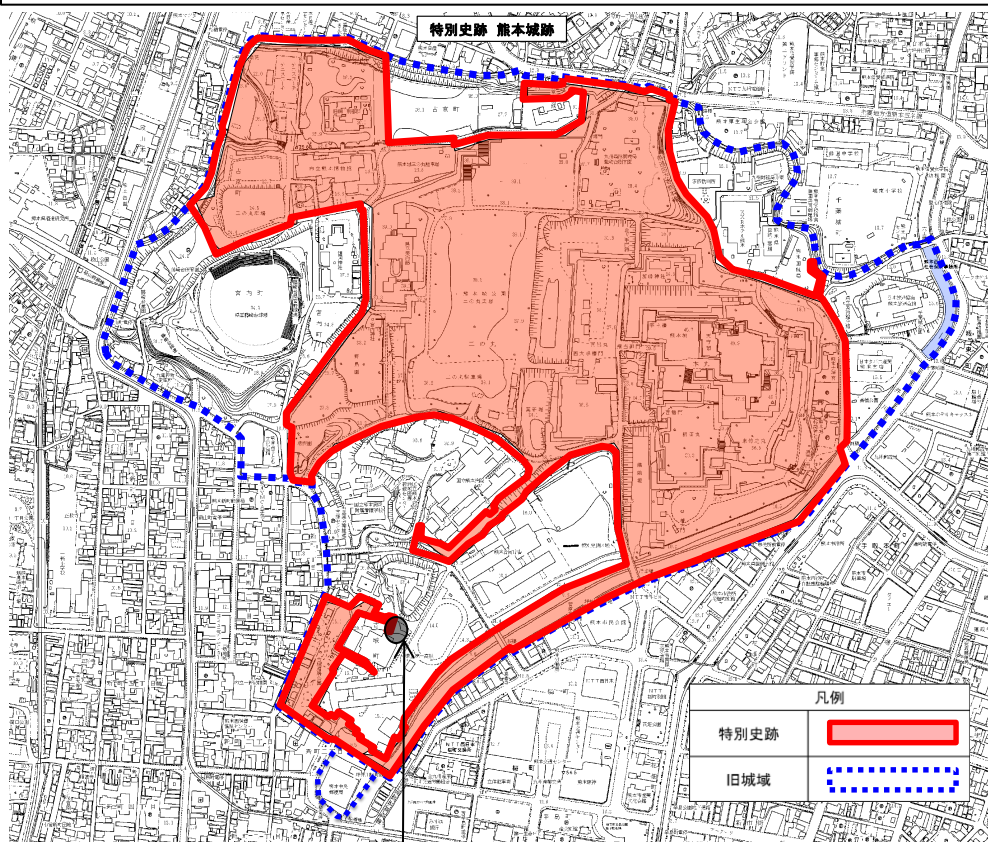
		メリット	デメリット
熊本城 城域周辺 (※「熊本城跡の保存活用の考え方」を踏まえて整理)	創建地(県立第一高校体育館辺り)	・創建の歴史的背景を踏まえると、移築先に相応しい。(熊本城と西南戦争、日赤発祥の歴史を含む)	・移築には発掘調査を含む調査研究に基づく必要があるが、推定地が高校体育館辺りであり、実現には既存施設の撤去など物理的な課題があり困難 ・移築が出来る場合でも、不特定多数を対象とした一般公開は、高校の安全管理上の問題など解決すべき課題が多い。
	創建地以外の城域内	・創建の地の近隣であれば、創建の歴史的な雰囲気を伝えることが出来る。 ・熊本城と一体的な来場者誘導が期待できる。	・史実に基づかないため、特に特別史跡内では理由付けが出来ず、現状変更の許可が困難 ・熊本城内の歴史的建造物との時代的な調和が取れない。 ・正しい創建の歴史的背景を踏まえていない。
	城域外の周辺地域	・移築の手続き等が容易 ・熊本城から近い場合、一体的な来場者誘導が期待できる。	・創建の歴史的背景を踏まえていない。 ・移築に必要な一定の面積や、公共交通機関の利便性などを持つような移築に適した市有地がない。 ・用地買収を伴うと、工事費を含め10億円以上かかることも想定され、財政的に厳しい状況。 ・熊本城から遠い場合、一体的な活用が出来ない。
現在地 現在地周辺 (水前寺)	現在地(水前寺江津湖公園内)	・現在地に移築され約50年が経過し、水前寺を代表する歴史・観光施設として広く定着 ・造成費が不要で経費的に安価に実施できる。 ・漱石大江旧居との一体的な活用が可能	・創建の歴史的背景を踏まえていない。 ・奥まった場所のままであるため、これまで以上の活用の効果は期待し難い。
	水前寺江津湖公園内の芝生広場の一角 (市立体育館前電停横)	・現在地に移築され約50年が経過し、水前寺を代表する歴史・観光施設として広く定着 ・交通機関の利便性が良く、移築に必要な面積が確保できる。 ・「水前寺江津湖公園」内での移動であり、移築に関する法的手続き等が比較的容易 ・造成工事も、更地の広場を活用するため、比較的安価に実施できる。 ・成趣園と江津湖を結ぶ拠点に位置し、ジェーンズ邸の新たな役割や活用が期待できる。	・創建の歴史的背景を踏まえていない。 ・漱石大江旧居との連携の工夫が必要

(3) 上記を踏まえた市の方針案・・・水前寺江津湖公園内の芝生広場の一角への移築

- ・利便性の向上による市民や観光客等の来場者の増加が期待される。
- ・地域に親しまれ定着してきた歴史と、ジェーンズ邸の持つ歴史的建造物としての価値や存在感を踏まえ、成趣園と江津湖を繋ぐ拠点として観光や地域活性化に資する、新たな効果も期待できる。

※館の展示等の中で、ジェーンズ邸の古城地区における創建の歴史的背景をしっかりと伝えていく。

参考資料①熊本城跡の特別史跡の指定範囲と旧城域の範囲



創建の地(古城地区)
※県立熊本第一高校内(体育館北東あたりと推定)

参考資料②ジェーンズ邸の芝生広場移転後の利活用イメージ



【参考資料】熊本城周辺＝城域外の旧城下町の移築先の調査

(1) 調査目的

- ・ジェーンズ邸の城域周辺への移築に関して、城域外における移築候補地となる可能性がある公園などの平坦地を持つ市有地等（国等からの貸借地を含む）を把握し、さらに、面積や利便性などの立地条件についても併せて調査・整理した。

(2) 調査概要

- ・調査範囲：熊本城周辺の旧城下町（新町・古町方面、上通・下通・桜町周辺、京町・坪井方面）
- ・調査対象：上記地域内にある公園などの一定の平坦地がありそうな市有地等
- ・調査方法：各調査地を下記の項目について、担当職員が実地調査等により現況を確認し、整理を行った。
 - ①移築可能面積について※移築先の理想面積：1,500㎡以上（建物320㎡＋日赤モニュメント＋トイレ＋庭＝安全管理用。駐車場は除く）
 - ②公共交通機関の利便性について ※市電の電停からの距離
 - ③熊本城との一体性について ※エントランスである桜の馬場や二の丸駐車場からの距離
- ・調査期間：平成27年度 ※平成29年7～9月にかけて再度、現況等について再確認

(3) 調査対象地（15箇所）

- ・新町・古町方面（5箇所）、上通・下通・桜町周辺（5箇所）、京町・坪井方面（5箇所）

(4) 調査結果（面積が1,000㎡以下の場所は省略）

	公園等名	所在地	面積(㎡)	①移築可能面積 (移築可能なオープンスペースの有無)		②公共交通機関の利便性 (最寄電停からの徒歩距離)		③熊本城との一体性 (エントランスの城彩苑又は二の丸広場からの徒歩距離(最短))	
1	島崎1丁目公園	島崎1丁目	5,700	△	全面的に公園として活用中	△	約600m	×	約950m（二の丸駐車場から）
2	JR高架下(高麗門跡)	横手1丁目、新町4丁目	1,500	×	史跡指定予定地。敷地が細長く建築も困難	—	—	—	—
3	段山公園	段山本町	2,360	△	全面的に公園として活用中	◎	隣接	×	約900m（二の丸駐車場から）
4	鍛冶屋町公園	鍛冶屋町	1,920	△	実質1,200㎡程度、狭くビルの谷間、全面的に使用中	○	約300m	×	約1000m（城彩苑から）
5	花畑公園	花畑町	2,620	×	史跡指定想定地	—	—	—	—
6	辛島公園	辛島町	3,440	×	別途、再開発予定地	—	—	—	—
7	蓮政寺公園	安政町	2,660	×	八雲旧居もあり、面積不足	—	—	—	—
8	白川公園	草葉町	20,000	○		○	約300m	×	約1200m（城彩苑から）
9	坪井1丁目公園	坪井1丁目	1,020	△	狭い。全面的に公園として活用中	×	約1100m	×	約1400m（城彩苑から）
10	京町台公園	京町2丁目	1,220	△	狭い。全面的に公園として活用中	×	約1400m	×	約1300m（二の丸駐車場から）
	公園等名	所在地	面積(㎡)	同上		同上		成趣園との一体性 (現行入口からの徒歩距離)	
参考	現在地	水前寺公園	3,200	○		△	約450m	△	約450m（北門から）
	市立体育館前電停横の芝生広場	水前寺公園	約7,000	○		◎	隣接	○	約300m（正門から）

○移築可能性面積あり
△一定の面積はあるが、移築には課題あり
×移築可能性なし

◎隣接、○徒歩5分以内（～400m）、△徒歩5分～10分（400m～800m）
×徒歩10分以上（800m～）